

## さらば楽園！

木下高德

退職後の人生はいかなるものなのであるか？ もう一度生き直すに値する、豊かな人生があるのであるか？ どうもあるような気がしてならぬ。そうでなくて「退職願」を提出して以後心に充ちた、この巨大な開放感と発奮がどこから発したのか、説明がつかぬからだ。

ぼくが跡見学園女子大学の教壇に立ってから一〇年ほど過ぎた頃のことである。当時未だ五〇歳前後にしか見えない若々しいお姿をしたA先生が、大学執行部でも最も多忙な職に、ぼくが赴任して以来一度も退くことがなく就いていた。学者としての、教員としての先生の立派さだけでなく、その多忙な職を率先して引き受けていらつしやる先生の人生態度を、ぼくは尊敬していた。それまで一度として、雑事の海を泳ぐ苦勞について不平を口にされるのを聞いたことがなかったが、定年退職の日を六ヵ月ほどあとにひかえた頃、先生はふと洩らされたことがあった——「間もなく、長いこと忙しくてできないでいた趣味の旅行やスキーや登山に思う存分打ち込めると思うと、嬉しくてならないのです。木下さん一緒に大いに登山とスキーをやりましょう」

その後、先生はご退職の日まで数回、そう言ってぼくを誘ったのであった。もちろんぼくはそのたびに、喜んでお伴します、と答えていた。ぼくも自分が趣味とするスポーツを先生と一緒にするのを楽しみにしていたのだ。こうして先生はご退職の日を迎えられたのだが、春が過ぎ、夏が過ぎても、先生からのお誘いはなかった。先生のその後の消息をぼくはじめて耳にしたのは、晩秋になってからだ。それは定年を二年数ヶ月後にひかえたB先生の口を通してだった——「A先生にひょっこり電車の中でお会いしたんだけどね、先生見

違えるばかり歳をとってしまったって、シヨンボリと座っていらっしやったんですよ。びっくりしましたね」

ぼくがご退職前の先生から「退職したら登山とスキーを一緒にやりましょう」との誘いを受けた話などを口にする、B先生は「A先生は教職を自らの天職と考えていた方だから、そのような話をしてご退職後に襲われると予想される寂しさと空虚感を紛らわせていたのでしょう」とおっしゃった。それから、一年も経たない頃のことだった、A先生の訃報を聞いたのは。

だが、ついでに話すと、B先生はA先生とは違った方だった。九〇に手が届く現在も、まだカクシヤクとしていて、お仕事もされている。ぼくは自分はどうしてもB先生であらねばならないと思っている。ぼくは教員ではない天職が自分には与えられているかもしれないのに、まだそれを果たしていないという、思い出すと苦い自覚を、長い間心の隅に押し込めてきたからだ。

ぼくがはじめて跡見学園女子大学に非常勤講師として赴任した三十三年前には、大学の建物は武蔵野の自然の清澄な雰囲気に溶け込んで、ひっそりと静もっていた。グリーンホールも図書館も体育館も二号館も不言亭も、それにもちろん三、四号館もまだ影も形もなく、ただ現在の一号館と合宿者だけが建っていて、テニスやバスケットなど球技を楽しむコートや草地が遠く広がっていた。学生たちでさえ自家用車を運転してきて構内に駐車することが許されていたが、正門前の信号はまだ設置されていなかった。それほど川越街道を走る自動車の数はまばらだったのだ。他に類を見ないほど広々とし、静寂に満ちた学校、それが跡見学園女子大学のためずまいだった。

北アルプスの裾野で育ち、登山を趣味とし、自然の中にいるときに最も強烈な生存感に満たされるにもかかわらず、都心の大学・大学院を出て、雑然とした街中の高校で、次いで大学で教歴を重ねはじめたぼくにとっ

て、跡見学園女子大学はまさに自分が働くに最も適った学校に見えた。ただ一つだけ欠点があった。まだ武蔵野線が通っていなかったのだ。都下の国立に住んでいたが、どのコースをとって通っても最低二時間はかかるので、ぼくは一生取得することはないと考えていた運転免許証をとるはめになった。こうして二年後の三十一年前、専任にならないか、との誘いを、ぼくは何の迷いもなく、むしろ嬉々として受け入れたのであった。

実を言うと、ぼくは大学三年時を終える頃になるまで、自分が将来大学の教員になるなどは夢にも考えたことがなかった。それより一〇カ月ほど前からは、ぼくは天職と考えた仕事をして主なたつきとしていたのだ。だが大学でのゼミの指導教授が、何を間違えたのか、会うたびに言うのだった——「きみ、大学院に行きたまえ。詩なんて書いていたって顎を動かすことはできんぞ。大学の教員になればだ、週に三日仕事をするだけいいんだ。いやそれだけじゃない、一年に五カ月の休暇があるんだ。だから好きなものを書き散らす時間は十分にある」

ぼくは週に二、三日、先生の研究室に伺っていた。最低でも週に二日は顔をださないと先生はご機嫌がわるいのだった。それでほとんど一日か二日おきに先生に攻められていたことになる。「こうすれば、安楽で、快適な生活が待っている」と囁かれて、抵抗できる人間もいるのであろうが、ぼくはだめだった。ぼくは亀先生の甘言の背に乘せられて、龍宮城への道を辿りはじめてしまったのであった。

かくしてぼくは大学の専任教員になったのだが、いずれ、数年のうちには以前の仕事に戻るつもりでいた。少なくとも二足のワラジは履くつもりでいた。だが跡見学園女子大学はまさに居心地のよい楽園とも言えるところであった。四季折々花々が咲き乱れ、たて看板など見たくてもなく、ゼミには毎年くじ引きが必要なほど学生が集まり慕ってくれる楽園、それに何よりも友情に溢れた友人と同僚たちにとりまかれていられる、まさに楽園、最高に居心地のよい龍宮城だった。こうしてぼくは罨に落ち、ここに捕らわれて月日の経つのも夢の

うち、友人鯛や美女平目とともに舞い踊りしているうちに、白髪白髭百皺の年寄りになっているのに、ふと我にかえり、気づいたというわけだ。ふと我にかえったきっかけは、肉食の国への放浪が過ぎて癌になったからだが、もし病氣にとりつかれていなかったら、定年を迎えるまで、きつと舞い踊りしていたことであろう。もつとも五、六年ほど前に、ここは突如龍宮城の面影を失いはじめ、寒気が押し寄せて来はじめたのだが。

跡見学園女子大学が氷河時代へと転回しはじめて以後、一年に一人ほどの割合で、病に倒れる同僚がでて心を痛めたが、それが半年に一人となり、今では数カ月に一人となっているように、ぼくの目には見える。これまで順次お倒れになった先生方はほとんどみな、跡見学園女子大学が樂園であった時代をエンジョイされた先生方ではあるが、みな学者としても、教師としても文句のつけようのない立派な先生方であった。それらの先生方に共通な特徴を導き出してそう気づいたぼくは、それなら自分は大丈夫、風上にも置けない超へポ浦島太郎学者、超へポ浦島太郎教師なのだから、とすっかり安心しきっていた。そのぼくが、二カ所も同時に癌に冒されたというのは、一体どうしてなのであろう？

これはやはり放浪にウツツをぬかしていたやつがれに下された天罰なのであろうか。癌というのは手術と言うモグラたたきをしながら彼岸の国へと陥ち行く病ゆえ、今後何年生きられるかわからない。そういう体調になつて、しかも頑迷固陋の歳になった今になつて、二〇代後半で打ちきつたままにしてある、今となつてはもはや無理と思えるあの仕事に打ち込まなければならぬと、我にかえり気づいた次第である。

退職願を提出以後に押し寄せて心に充満した開放感と発奮は、またあの厳しくはあるが充実感に満ちた仕事に戻り、それに専念しなくてはならないのだ、という自戒の念から発しているのであろう。

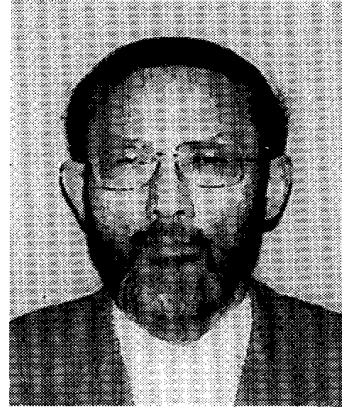
ご自分が優れた学者、立派な教師だと自覚なさっていらっしやる友人・同僚諸氏よ、いやへポ学者・へポ教

師だと自覚なさっていらっしゃる諸氏もだ、諸氏がくれぐれも健康に留意され、十分なる休養を摂るよう心がけられることを願ひ、念じる。そしてやつがれのようにボケないうちに退職され、亀のように長生きされて、人生でやり残していることを完結されることをせつに願う。

やつがれにかくも長きにわたってお与え下さったご厚情、ご友情に対しわが持てる限りの感謝を奉呈し、諸氏のご健康とご奮闘を祈念する。

木下高德 (きのしたたかのり)

生年月日  
一九三七年二月五日



現住所  
東京都国立市富士見台一―二七―一―一九―五〇二

学歴

一九六八年三月 早稲田大学教育学部英語英文学科卒業  
一九七〇年三月 早稲田大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻修了(文学修士)  
一九七四年三月 早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学

職歴

一九六八年四月 早稲田実業学校非常勤講師  
一九七〇年四月 神奈川大学非常勤講師  
一九七二年四月 跡見学園女子大学非常勤講師  
一九七四年四月 跡見学園女子大学専任講師  
一九七七年四月 跡見学園女子大学助教授  
一九八〇年八月 米国チューレン大学客員教授  
一九八二年四月 跡見学園女子大学教授  
一九八二年四月 早稲田大学非常勤講師(一九九一年、一九九二年休職)  
一九九一年四月 ハーバード大学客員研究員

業績

【著書】  
『エデンの東 フンボルトの西』(二〇〇二・一〇、れんが書房新社)

【学術論文】

「トルーマン・カポージェイとシュールレアリスム」『早稲田大学英語英文学叢誌 第四号』(一九七〇・五、早稲田大学)  
「トルーマン・カポージェイ試論」(一九七三・一二、『とらんしじよん』評論社)  
「アメリカにおけるマイノリティ文学の消長」『ゆべにりあ』一〇号(一九八二・三)  
「バーナード・マラマッドの『アシスタント』における自己改革」『跡見学園女子大学紀要 第二七号』(一九九四・三、跡見学

園女子大学)

「ヘミングウェイの生と死(一)」『跡見学園女子大学紀要 第二九

号』(一九九六・三、跡見学園女子大学)

「ヘミングウェイの生と死(二)」『跡見学園女子大学紀要 第三二

号』(一九九九・三、跡見学園女子大学)

上掲以外の学術論文、翻訳、口頭発表などは、省いた。